

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A study on career development for pre-service teacher trainees

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金沢, 晃, KANAZAWA, Akira メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2311

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



教職志望学生のキャリア形成に関する一考察

金沢 晃

1. 目的

本研究の目的は、教職志望者のキャリア形成の望ましいあり方の構築を目指して、近年の教職志望者の志望動機や教職観、教師観を把握するための基礎的データを収集し、考察することである。

日本の教育現場においては、進路指導はともすれば進学先や就職先を決定するための出口指導となりがちであった（三村、2004）。この反省から、1999年より中央教育審議会答申にて、進路指導に代わり、キャリア教育という用語が用いられるようになった。キャリア教育とは、望ましい職業観・勤労観および職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育のことである。一方で現代社会においては、将来の展望を見通すことが困難になっているため、大学生のキャリア形成においては、学生が社会的・職業的に自立するための支援がますます必要となっているとの指摘がある（田村、中山、藤田、小野 2015）。

教員養成課程をキャリア教育という観点から捉えなおすと、望ましい職業観、勤労観、主体性を教職志望者が身につけることが求められることになる。一方、近年の日本社会においては、教師は厳しい視線を向けられることになっている。例えば、「教職の意義等に関する科目」新設の際に、文部省（当時）は、当該科目新設の趣旨として「知識の伝達のみによってはいかに困難であっても、発想を変え別の方法を工夫することで『教員としての使命感』や『教育的愛情』を教員養成教育の中で何とか効果的に育てること（あるいは、教員の学校不適応事例の増加等が近年指摘されていることから、敢えて厳しくいえば、そうした資質能力の修得が容易でないことを早期の段階で学生に認識させ、安易な教職志向を抑制・断念させること）ができないかという点」をあげている（吉田、2004）。つまり、教職志望者の職業観、勤労観、主体性の育成が求められる背景には、教員の学校不適応事例や安易な教職志向という問題が指摘されているのである。その問題の解決には、教職課程におけるキャリア教育の充実が必要である。

教職志望者のキャリア形成に関する先行研究について代表的なものは、藤原・仙崎（1985）、大西（2011）などがある。後者は私立大学の教職課程を対象とした、教職志望動機等に関する基礎資料の収集が目的であり、前者は教育学部学生を対象に教職意識の形成過程の構造的な把握を目的とした調査である。本研究では、外国語学部生を対象とした調査を行う。教育学部志望者と比較すれば、みなが教職に対する高い意識は持っていないと考えられるが、語学に対する高い専門性を志す学生を対象としていることから、藤原・仙崎の用いた方法を参考に、外国語大学における教職志望者の教師観、教職観に関する基礎的データを収集することにする。

2. 対象と方法

2.1 調査対象

近畿地方にある A 大学外国語学部の教職課程に在籍する学生を対象とし、80 名の有効回答を得た。80 名のうち、1 年生 25 名、2 年生 33 名、3 年生 16 名、4 年生 4 名、その他 2 名が大学院生であった。

2.2 調査内容

藤原・仙崎（1985）が、教職志望学生の進路形成を調査する目的で作成した項目を参考に、質問紙を作成した。藤原・仙崎は、教育学部の学生を対象に調査をしているため、本調査では、教育学部進学決定時期を、教職志望決定時期に変更して実施した。その他の調査項目内容は、大学進学決定時期、教職志望動機、教師としての望ましい特性、教師としての力量について尋ねるものとなっている。回答方法としては、大学進学決定時期と教職志望時期については、それぞれ「小学校」「中学校」「高校 1 年生」「高校 2 年生」「高校 3 年生」「高卒後」の選択肢を設け、回答を求めた。教職志望動機と教師としての望ましい特性の項目については、藤原・仙崎の調査と同様に、それぞれ、13 項目、15 項目から 2 項目を選択する複数選択方式を用いた。教師の力量に関する項目は、「全く重要ではない（1 点）」～「とても重要である（4 点）」の 4 件法で回答を求めた。それぞれの調査内容に関する具体的な質問項目は、表 3～5 に記載している。

2.3 調査時期および実施

調査は 2017 年 1 月～2 月に実施した。教職科目の「教育相談」「教育心理学」「教育課程論」の 3 つの科目にて質問紙を配布した。各講義の担当者が、授業時間を利用して集団で実施した。

3. 結果

3. 1 大学進学決定時期と教職志望決定時期

表1に示すように、大学進学決定時期は、小学校、中学校と回答したものが半数を超えている。一方で、教職を志望した時期については、表2に示したように、高卒後と回答した者が約半数を占めている点が特徴的である。高卒後と回答したのものの中には、入学後に初めて教職課程の存在を知った者、とりあえず資格を取得しておこうと考えて教職を志望した学生が一定程度存在すると考えられる。一方で、高卒前に教職を志望した学生は、教育学部などの教員養成系の学部ではなく、外国語学部の入学を選択したことから、英語教師に対する強い動機づけをもっていることが推察される。このことは、半数が教職への比較的強い希望をもって教職課程を履修している一方で、半数は教職に就くかどうか迷いながら履修を選択していることを示唆している。

表1 大学進学決定時期

	小学校	中学校	高校1年生	高校2年生	高校3年生	高卒後
度数 (%)	20 (25)	22 (27.5)	13 (16.3)	3 (3.8)	18.8 (15)	7 (8.8)

表2 教職志望決定時期

	小学校	中学校	高校1年生	高校2年生	高校3年生	高卒後
度数 (%)	3 (3.8)	16 (20)	7 (8.8)	6 (7.5)	12 (15)	36 (45)

3. 2 教職志望動機

表3に示すように、教職志望動機について最も多かった回答は、「親や親類に勧められて」と「子どもを教えるのが好きだから」(19.1%)の2項目が最多で、それぞれ全体の2割を占めている。その他、「教員の給与は安定しているので」(15.9%)「自分の性格にあっているから」(10.8%)の順に、多く選択されている。一方、「雑誌・新聞などの情報から」(0%)、「テレビ番組(ドラマ)に影響されて」(0.6%)「他大学、学部が不合格だったから」(0.6%)「教員は休暇が多いから」(1.9%)「教員になれる確率が高いので」(1.9%)を選んだものはほとんどいなかった。

森(1994)は、教職に内在する、生徒との関わりを通して経験される人間関係的価値を教職の内面的価値と概念化している。本研究の結果からは、教職の内面的価値(子どもに教えるのが好き)と同程度に、生活の安定性や教職に対

する周囲の評価という教職の外面的価値を、教職志望の理由としてあげていることがわかった。

また、その他の回答のうち「進路の選択肢を広げるために資格をとりたかった」という趣旨の回答をしたものが8名(5%)、担任や部活の顧問などとの関係を通して先生に憧れたという趣旨の回答をしたものが11名(7%)いた。

表3 教職志望動機

	度数 (%)
親や親類に勧められて	30 (19.1)
高校までの教師に勧められて	7 (4.5)
友達に勧められて	4 (2.5)
雑誌・新聞などの情報から	0
テレビ番組(ドラマ)に影響されて	1 (0.6)
他大学、学部が不合格だったから	1 (0.6)
教員は休暇が多いから	3 (1.9)
自分の能力・実力が発揮できるから	13 (8.3)
自分の性格に合っているから	17 (10.8)
子どもを教えるのが好きだから	30 (19.1)
教員の給与は安定しているので	25 (15.9)
教員になれる確率が高いので	3 (1.9)
その他	23 (2.5)
無回答	3 (1.9)

3. 3 教師としての望ましい特性

表4に示すように、教師として望ましいと思われる特性について最も多かった回答は「指導力に富んでいる」(15%)、「常に冷静で、公平な判断ができる」(15%)であった。次いで「根気強く、努力家である」(12.5%)「知識が豊富である」(10%)「ウィットやユーモアに富んでいる」(9.3%)「誰に対しても親切で優しい」(8.8%)と続いている。一方「正義感に富んでいる」と回答したものはいなかった。また「犠牲的精神に富んでいる」(1.3%)「厳しく子どもを指導する」(1.9%)「子どもと遊ぶのが好きである」(3.1%)「研究熱心である」(5%)と回答したものはほとんどいなかった。指導力や冷静さ、根気強さが上位の選択肢となったことは、藤原・仙崎(1985)の先行研究と一致している。上位の選択肢からは、知的で冷静で忍耐強い教師像が浮かび上がる。一方で、先行研

究で最も多く選ばれていた「子どもと遊ぶのは好きである」は、本研究では下位の結果となった。先行研究が初等教育課程に在籍する学生を対象とした調査であることが一つの要因と考えられる。

表4 教師としての望ましい特性

	度数 (%)
誰に対しても親切で優しい	14 (8.8)
研究熱心である	8 (5)
子どもと遊ぶのが好きである	5 (3.1)
スポーツが好きである	0
指導力に富んでいる	24 (15)
ウィットやユーモアに富んでいる	15 (9.3)
正義感に富んでいる	0
責任感に富んでいる	12 (7.5)
常に冷静で、公平な判断ができる	24 (15)
根気強く、努力家である	20 (12.5)
誠実に仕事ができる	12 (7.5)
犠牲的精神に富んでいる	2 (1.3)
知識が豊富である	16 (10)
厳しく子どもを指導する	3 (1.9)
その他	5 (3.1)

3. 4. 教師としての力量

この尺度は、先行研究において、因子分析の結果、3因子が抽出されていた。一方で、本研究では、最尤法における斜交プロマックス回転を行ったものの、明確な因子構造を見出すことはできなかった。

表5にあるように、平均値の高い項目は、「子どもの学習状況・悩み、要求などを適切に把握する力」(3.81)「わかりやすく授業を展開していく力」(3.71)「教師自身の実技能力(英語運用能力)」(3.71)「同僚などと協力しながら教職員集団の質を高めていく力」(3.62)「子どもの資質・適性を見抜く力」(3.61)「子どもに積極的にかかわっていく熱意や態度」(3.55)「子どもの問題や学校の問題を広い視野に立ってみることのできる度量の広さ」(3.51)「つねに研究・研修にはげむ態度と能力」(3.47)である。一方「PTAや地域社会の諸活動に積極的に参加する態度」(2.98)「視聴覚教材など教材機器を駆使できる技能」(2.96)

「学校運営全体の中で自己を位置づけ、その立場から考える力」(2.95)「芸術や文学に対するゆたかな理解と感性」(2.83)は、重視されていない項目であった。

平均値の高い項目は、子どもとのかかわりを通して子どもの状態を把握していく能力と、授業実践力に関する項目である。この結果は藤原・仙崎(同上)や、松本(1984)の結果にほぼ一致している。一方で、「同僚との協力」は先行研究に置いては平均値の低い項目であった。いじめ防止対策推進法が象徴するように、昨今の教育現場では、教員間の連携が重視されているが、この重要性が教職課程で学ぶ学生たちに浸透しつつあることを示唆していると考えられる。

表5 教師としての力量の重要度

	平均
1 子どもの資質・適性を見抜く力	3.61
2 子どもの学習状況・悩み、要求などを適切に把握する力	3.81
3 子どもの思考や感情を触発し発展させる教師の表現力	3.38
4 子どもに積極的にかかわっていく熱意や態度	3.55
5 子どもの問題や学校の問題を広い視野に立ってみることのできる度量の広さ	3.51
6 わかりやすく授業を展開していく力	3.71
7 教科書の中の教材をさまざまな角度からとりあげ指導する力	3.26
8 芸術や文学に対するゆたかな理解と感性	2.83
9 学校運営全体の中で自己を位置づけ、その立場から考える力	2.95
10 つねに研究・研修にはげむ態度と能力	3.47
11 視聴覚教材など教材機器を駆使できる技能	2.96
12 教師自身の実技能力(英語運用能力)	3.71
13 教育に関する諸問題を自分なりに理論的に考えることのできる力	3.28
14 同僚などと協力しながら教職員集団の質を高めていく力	3.62
15 PTA や地域社会の諸活動に積極的に参加する態度	2.98
16 記録の整理や保管など能率的な実務処理の能力	3.21

4. まとめ

本研究の結果からは、語学に関する高い専門性を求める外国語学部の教職課程においては、教職に比較的強い希望をもっていると考えられる者が半数を占めた。大西(2011)の研究における調査対象は、保健体育科に所属する学生が中心であるが、様々な学科の学生から構成されており、卒業後にすぐに教職に就くことを希望している学生は2割に満たなかった。この結果と比較すると、

より専門化された学部、学科の教職課程の学生は教職に対して比較的強い動機付けをもって取り組んでいると考えられる。

教職の志望動機の中身に関しては、先行研究では下位を占めた親族の勧めや経済的安定が上位を占めている点がかなり特徴的である。藤原らや大西の先行研究では、「子どもに教えるのが好き」「性格が合っている」や「自分の能力・実力が発揮できる」「専門的な知識、技術を活かせる」など、自身の特性や専門性に関する項目が上位を占めている。教職観についての調査（松浦、1996）においても、生活の安定を求める手段として教職を捉える傾向は乏しい。この結果は、日本の経済状況がまだまだ不安定で先行きに関する不安を学生が抱いており、経済的安定を得るための手段として教職を志望している学生が一定程度存在することを示唆している。その一方で、教育現場は深刻かつ複雑な問題を抱えていることから、経済的安定という動機付けのみでは教師として働くことは難しく、学校不適応や早期退職という結果につながるリスクが高い。

一方、昨今のキャリア教育の理論モデルでは、職業への適性を重視するのではなく、Superの職業的発達理論（日本進路指導学会、1960）のように、働き手の精神的な満足や自分自身を見つめなおし新たな発見につながるという個人の情緒的な成長につながるような職業選択が重視されるようになっている。その点からすれば、「子どもに教えるのが好き」「性格にあっている」という、情緒的な満足や内面的な要素が選択されていると言える。このように、同じ教職志望者でも、教師としての職業観の発達につながるような動機と、不適応や早期退職につながるリスクの高い動機という対照的な項目が上位に選択されているという結果となった。このことから、特に後者の学生が在籍していることを意識して、教職課程においては、教師観や教師像と自身の内面とのつながりを考えさせるようなキャリア教育が必要とされていると言える。

教師として望ましい特性としては、知的で冷静で忍耐強い教師像を理想像として学生が抱えていることがわかった。一方で、実際の教育現場では、いじめや暴力行為など、教師の感情をかき乱し、冷静な対応を困難にさせる問題が深刻になりつつある。この理想像があまりに強いと、実際とのギャップに苦しむ可能性が高くなる。そのため、感情のコントロールや忍耐が必要とされる感情労働としての教師という職業観を育てる必要があり、感情労働に取り組むことが教師、個人としての成長や職業発達につながるという観点からの教育が必要とされると考えられる。

教師としての力量については、既に述べたように、先行研究に比べて、同僚との協働関係をもつ力が重視されていることがうかがえる。これは近年、教育現場で重視されている教師の力量である。一方で、本研究においては、教師と

しての力量について、先行研究に見られたような因子構造は見いだせなかった。この背景には、教師の力量についての時代的、構造的な変化が考えられる。教師や保護者、他機関との協働関係を包括した、教師の力量を構造的に測る尺度の開発が今後の研究課題である。

引用文献

- 藤原正光・仙崎武 1985 教職志望学生の進路形成(1)-教育学部大学生の教職志望動機と教職観- 進路指導研究 Vol.5 pp1-5
- 松本良夫 1984 教員養成大学学生の進路志望と教職観 東京学芸大学紀要 第1部門 Vol.35 pp63-75
- 松浦善満 1996 学生の教職観と教育実習観についての一考察 - 教育実習前後のパネル調査を通して - 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 No.6 pp3-12
- 三村隆男 2004 キャリア教育入門 実業之日本社
- 森孝子 1969 日米学生の教職業選択に及ぼす要因-比較教育学における行動科学的研究試法-教育学研究 Vol.36 (3) pp12-21
- 大西麗衣子 2011 大学生の職業選択と教職志望動機 尚美学泉大学総合政策論集 Vol.12 pp16-21
- Super, D 1957 The Psychology of Careers. Harper & Brothers. 日本進路指導学会 (訳) 1960 職業生活の心理学 誠信書房
- 田村愛架・中山節子・藤田昌子・小野恭子 2015 教員養成大学大学生の生活・労働への準備性に関する一考察 鹿児島大学教育学部研究紀要 Vol.66 pp103-117
- 谷田親彦 2007 大学生が希望する職業の価値観に関する分析-大学入学初期における教職志望大学生の期待価値- 弘前大学教育学部紀要 Vol.98 pp59-65
- 吉田卓司 2004 大学教職免許取得課程における「生徒指導」論の現状と課題 大阪教法研ニュース Vol.213

Keywords: キャリア形成 教職志望者 教職観 教師像